
手をのばせば。

芙実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
手をのばせば。

【Nコード】
N8513D

【作者名】
芙実

【あらすじ】
昼下がりの屋上にいる沖田と神楽。特になにも話さない内に、沖田は眠ってしまう。

この手を伸ばせば君がいる。

だから私は元気です。

「手をのばせば。」

昼休み後半。私とコイツは誰もいない屋上にいる。

「ねみイ。」

コイツがそう言ったから私はコイツのアイマスクを
目もとにおろしてやった。

「っ…何しやがんでイ。」

「別に。ささやかな優しさアル。

誰もお前の寝顔なんてみたくないヨ。」

「悪かったな。」

そう言うてから5分。ホントにコイツは喋らなくなった。

「…………。ホントに寝たアル。」

神楽はそつと沖田の前髪に手をかけて、
アイマスクを外した。

「嫌味な位長いまつげネ。」

コイツはすう…と寝息を立てている。
私はコイツの髪を起こさないように撫でた。

「…………。」

陽の光に当たった沖田の髪は金色に光っていた。

「…………。好き。」

そのとき、髪を撫でていた神楽の手を、
パシッと沖田が掴んだ。

「そこまでされるといくら何でも

「気づきますぜイ？」

「わアッ。…何アルカ。」

「こつちが聞きてえよ。なんでさア。

いきなりアイマスクとつたと思ったら…」

「お前どっから起きてたアルかアッ!？」

沖田はいたずらに微笑んで、

「最初から？」

「なっ!？」

「そっとうっ…」

おもむろに神楽に近づいた沖田は、

「さっきの言葉の意味、教えてもらいまさア。」

今、私はこの瞳からは逃げられなくて。

赤くなる顔も隠せなくて。

そして、私は君に精一杯の言葉を贈るんだ。

「手をのばせば。」

(後書き)

読んで下さりありがとうございます！！

ご期待に添えなかつたら申し訳ございません。

文法などは未熟者ですので、遠い目で見ていただけると幸いです。

もし宜しければ、メッセージを頂けると嬉しいです。

ありがとうございましたっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8513d/>

手をのばせば。

2010年10月26日05時59分発行